

3-2					
主題	【 Peaceful Life 】 BPSD を伴う認知症入居者に寄り添うチームマネジメント				
副題	ユニットケアの環境を活かし BPSD の減少を目指して取り組んだ結果				
キーワード 1	人財育成	キーワード 2	BPSD	研究(実践)期間	14 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 響会 特別養護老人ホーム好日苑
発表者(職種)	若狭英彦(介護主任)
共同研究(実践)者	須藤岳(介護副主任)

電 話	03-3748-6193	FAX	03-5499-3230
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	好日苑は従来型(入居88床、短期入所9床)とユニット型(入居50床、短期入所10床)計158床で運営。「安心と暖かさ」を理念とし、Peaceful Life(穏やかな暮らし)の実現に向けた取り組みを行っている。また好日苑を第2の家として家族と共に介護を行う通い型介護を推奨。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

BPSDの対応については介護経験の浅い職員を中心にケアの手法がわからず精神的負担となっていた。好日苑は従来型3フロア、ユニット型3フロアがあり、フロア毎に配置された主任をリーダーに各フロアでの認知症研究発表会「通称N1 グランプリ」を令和6年3月に実施。その優勝研究発表作品を紹介する。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

BPSDを抑えるためには職員による適切な関わり「支援」と穏やかに暮らせる環境「ユニットケア」が必要ではないかと考察。職員による適切な支援を行う為の「人財育成」と穏やかに暮らせるよう環境を整える為の「ユニットケア」の手法を取り入れることで認知症によるBPSDを防ぎ穏やかに過ごせることができるのではないかと仮説した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①職員が入居者により興味を持ってもらう為に「その人を知る」ミーティングを行い、ユニットケアの取り組みとして活用していた「24Hシート」及び目標共有の為「センター方式シート」を活用し共通認識を持つ事とした。
 - ②入居者3名に対しBPSDが出現する時間の調査、日々の様子を記録に残し、居室担当を中心にアセスメント、支援方法を検討した。
- 「H様」排泄の失敗があると泣いてしまいメンタル面が低下、加えて帰宅願望が出現することが明確化した。失禁対策と並行して、失敗してもその事に触れず寄り添い、成功時には一緒に喜ぶ事、また通い型介護の一環として家族とも現状と目標を共有し、家族の写真や使い慣れた生活用品を持ち込んで頂き落ち着ける居室作りをした。
- 「S様」居室にいる事が多く物盗られ訴えが多い。特定の職員がその対象になることが多く、

居室担当との信頼関係を作る事を強化し、他職員も統一した声掛けで関わりを持った。またリビングやベランダで過ごす時間を作る事で気分転換となるよう取り組みを実施した。

「Y様」メンタル面の変動が観られ BPSD が出現すると「居室で過ごした方が良い」と決めつけた支援があった。BPSD が起こる前の状況、時間帯の調査、その時の居場所などアセスメント。フロア全体を家庭的な落ち着いた環境に変え、決めつけた支援もやめた。一人の時間・他者との交流の時間を分けメンタルの安定を目指すという事をみんなで決めた。

③ BPSD への対応についてミーティングだけでなく社内メールの活用や定期的に個別の面談を行い職員の不安軽減に努めた。

④ 24H シートを元に入居者様それぞれの生活リズムに合わせ介護量の多い日中帯の時間に職員を厚く配置した。

《4. 取り組みの結果》

「H 様」泣いてしまう事が減り、帰宅願望も減少。落ち着ける環境と課題に取り組む事で好日苑が目指している通い型介護が実現した。

「S 様」統一した声掛けを意識したこと、リビングで他者と過ごす時間が増えた事で物盗られ訴えは減少し次第に消失した。

「Y 様」BPSD が起こりそうな所から居場所を工夫する事で発症が軽減した。決めつけた支援も止めた為リビングにいる時間が増え他者との交流など生活が活性化。

3 名の入居者を中心に取り組みをしていく中で、短い隙間時間にも話し合いやメールでのやり取りが行われ、小さな気付きも共有出来る様になっていった。見えて来た課題を話す事も増え良いサイクルが生まれた。今回の取り組みについて職員アンケートを実施。取り組み当初に比べ互いのポジティブな面に着目することが出来るようになり意見交換の機会が増えたといった意見が多数あった。

《5. 考察、まとめ》

その人らしく暮らすユニットケアの理念を元に認知症の方へアプローチを行う事で、BPSD が軽減していく事を多角的に理解する事が出来た。家族も一緒に取り組んだ事例では職員が家族の想いに寄り添えるものとなり、リビングは設えや導線を意識し入居者自らが行動できる環境となったと思う。BPSD を軽減する事を目標として 24H シートやセンター方式シート等の道具をうまく活用しながらその人に合った関わり方や環境を家族と職員が一つのチームになって整えるプロセスが職員の意識改革に結び付いた事は大きな収穫だったと思う。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、本人(家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「センター方式シート」認知症介護・研修センター作成

「24H シート」一般社団法人 日本ユニットケア推進センター

《8. 提案と発信》

ユニットという環境が認知症の方にとっての強みとなるのではないか。BPSD の対応に精神的負担を感じやすい職員はどこ職場にも多いと思うが、認知症ケアに近道はなく困難な事に対して職員と一緒に小さい事から考えていく作業を積み重ねる事が大事だと学んだ。好日苑は人財育成を大切にしながら入居者様に寄り添ったケアをこれからも続けて行く。